

崖っぷちの法則

数年前から目の難病で見えなくなりました。彫刻家にとって失明は致命的、と思われるでしょうが、毎日普通に作品を作っています。私にとって作品を作ることは、生きることそのものだからです。

見えなくなる数年前から、目の回復を期待してある食事療法を実践しています。簡単に説明しますと、朝食を抜いてお昼に青汁と赤汁（人参ジュース）を飲み、夕食には青汁、赤汁に加え、豆腐、生の玄米をすり潰した汁だけを毎日食します。超低カロリーな生活です。加えて週1回程度の断食をします。

この食事療法は、飢える時にしか再生の細胞が働かないという理論に基づいています。できる限り空腹の生活を送ることで体の再生を促すのです。これは「崖っぷちの法則」そのものなのだと私なりに気づきました。

「甘いネギ」として知られる私の地元の特産・下仁田ネギは、春に植えた苗を夏にあえて植え替えます。その時半分くらい育った芽を切ってしまいます。これはネギにとって相当なストレスになります。そのうえ冬に霜が降りることでさらにストレスがかかります。下仁田ネギの甘さは、これらのストレスに打ち勝とうと細胞が闘った結果なのです。植物と同様に人間の体にも同じことが起きているのだと思います。人間飢えると、なんとか生きなければならぬと体の細胞が特別なスイッチを押すのでしょうか。

私は目が見えなくなったことで、当たり前ですが文字が読めなくなりました。そのためメモ書きができなくなり、すべての事を記憶しなければならなくなりました。仕事の予定も家族との約束もすべて頭の中に記憶させるしかないのです。まさに崖っぷちです。このとき、飢えの緊急発動令が脳内に起こるらしく、記憶脳が冴えわたります。約束した日時、計画、行動、その結果など、人と話した内容はほぼすべて記憶しています。私の傍にいる人は皆、その記憶の正確さに驚いてくださいます。

彫刻でも同じことが起きています。見えなくなっても作家活動を辞めるつもりのない私にとって、作家としての飢えが崖っぷちスイッチを押しました。

およそ30年、木彫の作家として生きてきましたが、見えなくなると刃物を扱うことが難しくなったため、木彫は諦めました。最近では、仏像制作の一手法である脱乾漆技法を自分なりにアレンジした独自の成形方法で作品を作っています。

粘土を使って形を作りますが、粘土を扱いだした最初の頃はうまく形を把握することができず、天地左右の距離感を知るため粘土にビー玉をはめ込んだり薄い板を形のポイントに差し込んだりするなど、試行錯誤、四苦八苦しながら制作していました。それが最近では、形を作るための補助の道具はいらなくなってきました。私の脳内が見えなくても形を作る方法を学びだしたようです。これには私自身驚いています。

人間、崖っぷちに立つと、新たな扉が開くようです。体を断食で飢えさせることで、細胞が生きていくために活性化するという「崖っぷちの法則」は人生の哲学に通じるものなのかもしれません。

私が開いた扉の前には、誰も踏み込んだことのない雪原が広がっています。

人生、後半楽しくなってきました。